

南蛮の風紀行-30 さようなら 南蛮の風

明日はいよいよ帰国という日、わたしはもう一度アルメイダの生地に行き、その路地の片隅にしばらく座っていました。別にセンチメンタルになっているわけではなく、アルメイダにもう一度語り掛けたかったのです。夕暮れ時のアルファーマには、人々の生活の匂いが漂っています。そこここで夕涼みに出ている老人たちの間を縫うように、子どもたちが歓声を上げて走っていきます。

ギリシャのモラトリアム騒ぎは何とか一件落着のようですが、ユーロ圏のだぶついた資金が、発展途上にあるポルトガルやギリシャや中東欧の国に流れ込んで、必要以上、あるいは実力以上の借金と公共投資が膨らんでいることは、旅人のわたしにもはっきりと見えています。現在、ユーロ各国には地中海の南側からの経済的な理由による移民の流入が続いています。移民が公認なのか違法なのかに関わらず、南ヨーロッパ諸国の治安を悪化させ、元からの国民の不安と不満を講じさせています。特に首都であるマドリッドとリスボンでは、北アフリカから流入する正規・不法の移民たちのために治安が悪くなりつつあることを、初めて訪問したわたしでさえ感じていました。



サン・ビセンテ・デ・フォーラ教会とサンタ・エングラシア教会の間の、旧市営市場後の広場では、泥棒市と呼ばれる蚤の市が開かれています。確かに妖しい露店もたくさん出ていました。

そしてその治安の悪化の背景にあるものを知れば知るほど、わたしは何となく中世末期から近世初期にタイム・スリップしたような気分になります。ローマ帝国が滅亡した原因は当時の世界の外からの脅威（フン族の侵入など）も含めて、決して何か一つに帰するものではないのでしょうか。しかも地中海を舞台にした平和願望と経済覇権の防戦は、7世紀からなんと18世紀まで一千年以上も続いたのです。わたしには21世紀の今日の構図にもまた、その地中海が辿ってきた歴史をくり返しているようにしか見えないのですが。



アルファーマを見下ろす丘の上のサンタ・エングラシア教会にある国立霊廟には、アルファーマが生んだ歌姫、ポルトガルのソウルミュージック、ファドの歌手アマリア・ロドリゲスの棺も安置されています。日本で言えば美空ひばりのような人ですが、その人を英雄や貴族と共に安置するというのがポルトガル人の素敵な気質なのでしょう。

12世紀ごろヨーロッパ圏から何とかムスリム（イスラム教徒＝サラセン人）を追い出したいというキリスト教圏の巻き返しが始まりました。その頃はもちろん、日本との直接交易が始まった16世紀でさ



南欧の夏の日差しも少し傾けば、アルファーマの狭い路地には届かない。夕暮れ時の涼しい風を求めてここに暮らす人々が談笑していて、その脇を風と一緒に子どもたちの歓声も駆け抜けていきます。

え実は地中海を挟んで南北の、つまりキリスト教徒とイスラム教徒の間の貿易は、安定的に維持されていました。それもイタリアやフランスの南岸からの交易品は、造船用の木材や金具類、航海用の羅針盤や望遠鏡などが含まれており、北アフリカのサラセン側はそれで船を作り海賊となって、ヨーロッパ各都市を襲っていたのです。海賊は金目のものだけでなく、都市やその郊外に住む貧しい農民や漁民とその家族を奴隷として売り飛ばすために拉致して行きました。その拉致された奴隷たちを解放するために、ヨーロッパのキリスト教徒たちは、貿易で儲けた金の一部を義援金として騎士団に拠出し、騎士団は所属する騎士や修道士を救出のための使者として、北アフリカの諸都市に派遣していました。

キリスト教徒対イスラム教徒という図式で見る事は昔も今も簡単ですが、地中海上で起きていた経済交易、繰り返された数々の戦いを思い起こすと、どんな時代も強い者たちの付けを弱者が払われるこ

と、武器や武器に準ずるものが回りまわって自国民を不幸に陥れることなど、単に宗教対立ではない、人間の業と国際社会の矛盾が見えてしまいます。それはともかくアルメイダが東洋を目指した時も、伊東マンショがバレンシアからローマを目指して船出をした時も、実はまだまだ今と同じようにインド航路沿いのイエメン沖にも、地中海の中心であるイオニア海にも、イスラム教徒である海賊が出没していたのです。

アルメイダは王立医学校を卒業し、当時のポルトガル王から直接医師免許を授けられたエリート中のエリートでしたし、大金持ちの息子でもあったのですから、前途は洋々だったはずですが。なにも危険極まりない海外を志さなくても、医師としてセレブとしての彼の人生は保障されていたはずですが。彼の日本での境遇や、故国を遙かに離れた天草河内浦に埋葬されざるを得なかった最晩年の姿を思い浮かべると、このアルファーマの丘を駆けまわっていた頃の彼のあどけない少年時代の姿に声を駆けざるを得ません。

「君は何故、故国ポルトガルを捨てたのか」

「君は何故、遙か極東の日本に骨をうずめようと思ったのか」

太陽の沈まない国とまで言われた故郷イベリア半島を捨てざるを得なかった16世紀のあの時の自分の来し方を遠目に見るように、一度はわたしの方を振り返ったものの、21世紀のアルメイダ少年はわたしに向かって一言も発しないまま、アルファーマの細い道を風のように走り去っていき、彼の仲間を呼ぶ歓声だけが、どこからか吹いてくる夕昏時の南蛮の風と共に、いつまでも路地に漂っていました。 (完)